

## 『笠森寺縁起』にみる平忠常と上総・千葉氏の記憶

野口 実

はじめに

京都女子大学宗教・文化研究所の客員研究員として、二〇一七（平成二十九）年度以来、「日本中世社会における宗教者の政治・文化的環境に関する研究」というテーマで研究を続けている。

日本中世、特にその前期には、親鸞をはじめ多くの優れた宗教者が輩出している。本研究は彼らの置かれた政治・社会的環境を照射する一方、その行動を通して当時の文化の状況を具体化していくという双方向の方法によって日本中世における宗教ないしは宗教者と政治権力や社会との関係、さらには日本中世文化における宗教の位置を問うことを目的とするものである。

私は専任研究員（教授）に在任中の二〇〇九（平成二十一）年度から二〇一二（平成二十四）年度まで、当研究所における共同研究の大テーマとして「法然・親鸞登場の歴史的背景に関する研究」というタイトルを掲げて、「地方武士の在京と文化の伝播」（二〇〇九年度）・「中世における都鄙の文化・社会情況」（二〇一〇年度）・「宇都宮氏

周辺の文化環境」(二〇一一年度)・「目代・沙汰人の活動にみる都鄙交流」(二〇一二年度)を小テーマとする研究を進めてきた。<sup>1)</sup>

二〇一三年度以降は、その成果を踏まえる形で、地方武士の文化活動に関する研究を行うと同時に、中央における宗教権門の存在形態と関連づけながら、宗教とりわけ仏教史の中にその成果を位置づける作業を進め、その際、従来の歴史学的方法論のみならず、説話・伝承なども活用するために、文学・民俗学の援用をはかってきた。<sup>2)</sup>

二〇一六年度は親鸞同様、畿内出身で常陸国に下向した忍性を考察対象に加え、奈良県域に所在する関連史跡の調査を行い、また、京都と東国との文化交流の観点から太平洋の水運機能に着目し、その成果として「中世成立期の安房国―源頼朝上陸の背景―」を『研究紀要』第三〇号に発表した。なお同第三一号には、六月二十五日に開催された京都女子大学宗教・文化研究所公開講座における講演内容の要旨「京都と鎌倉」を掲載した。

二〇一七年度は鎌倉時代を中心に千葉氏や宇都宮氏一族の文化活動を現地調査を加えながら検討し、千葉氏については『千葉史学』第七二号(二〇一八年)に「千葉氏と京都―中世前期を中心に―」を、宇都宮氏一族については、『研究紀要』第三二号に「東国に下った仏教者と在地武士―忍性・親鸞と宇都宮氏一族―」を発表した。また、特に宇都宮氏の一族で親鸞の居住した常陸国笠間の在地領主であった笠間氏に焦点をあて、二〇一八年二月二十四日、笠間市教育委員会主催のフォーラムで「笠間時朝と京都」と題する講演を行い、二〇一九年には、その講演内容をベースにした「笠間時朝と京都」を掲載した笠間市教育委員会編『笠間時朝とは何者か?』(かさま歴史ブックレット2)が刊行されている。さらに、「宇都宮氏の成立と河内源氏―下野の武士団と京都権門―」が、二〇二〇年一月に戎光祥出版より刊行される予定の江田郁夫編『中世宇都宮氏 一族の展開と信仰・文芸』に掲載されることになっている。

二〇一八年度は、二〇一七年十二月十八日に秋田県横手市で開かれた「後三年合戦シンポジウム」源義家の評価と清原氏研究の現在」と翌年の十月十三日に秋田市で開かれた中世文学会秋季大会に講師として招かれたことを契機に中世前期の出羽にも関心を広げて、「出羽国由利郡地頭由利維平をめぐって―源頼朝政権と出羽―」を『研究紀要』第三二号に、また「中世前期、出羽に進出した京・鎌倉の武士たち」を『中世文学』第六四号に発表した。二〇一八年七月七日には、研究対象とする地域内の重要地点と目される下総千田庄に位置する千葉県香取郡多古町主催の歴史講座において、「下総藤原氏と千葉氏―千田庄は中世下総国の文化の中心地だった―」と題する講演を行う機会を得た。

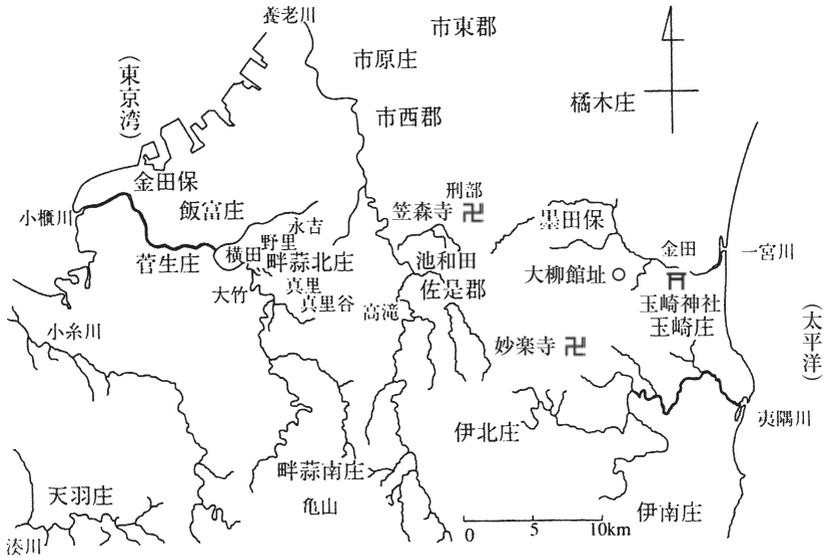
二〇一九年度は、これまで進めてきた下野国南東部・常陸南西部に展開した宇都宮氏一族や下総国北東部で活動した千葉氏一族の研究成果を踏まえ、常総内海を取り巻く地域における宗教者の活動を支えた政治・文化環境について考察を進めている。当初、太平洋水運との接続という観点も含めて、浄土宗第三祖となる然阿良忠を外護した千葉氏一族で下総国匝瑳南条庄地頭をつとめた椎名氏をテーマとして進めていたところ、椎名氏の所領内に位置したと考えられる山武郡横芝光町宮川の薬王院福秀寺に「承久元年」「大檀主平常秀平代（氏）」の胎内銘のある木造薬師如来像（像高一六二・二センチメートル）が伝存されていることを知った。<sup>⑤</sup>そして、この紀年銘と人名を考え合わせると、「平常秀」は十二世紀初頭段階の千葉氏一族中最有力の存在で、歴史名辞上「上総千葉氏」と呼ばれる一族の祖となった千葉常秀に比定されることから、私の関心はこの「上総千葉氏」に向けられることとなった。<sup>⑥</sup>

上総千葉氏は頼朝政権の草創に大きく寄与した坂東最大の武士団の長である上総広常の遺跡を継承する存在で、その本拠地であった玉崎庄＝現在の長生郡一宮町・睦沢町の周辺には、妙楽寺（旧名は「叡泰寺」）の大日如来像をはじめ、広常あるいは常秀の時代に造立されたと考えられる仏像が多く伝えられているからである。<sup>⑦</sup>



妙楽寺大日如来坐像

1981年11月18日に千葉県高等学校教育研究会歴史部会の「長生地区臨地研究会」で妙楽寺を訪れた際に撮影したもの。



上総国笠森寺とその周辺

ただし、上総広常や上総千葉氏に関する歴史学サイドから評価できる文献上の知見を踏まえた研究はすでに行ったことがあり、<sup>(8)</sup> 屋上に屋を架すような愚は避けなければならない。そこで本稿では、直接的に歴史学の資料として評価されにくい、後世に成立した寺社縁起や地誌類に注目してみることにした。その場合、成立年代が明らかで、文学サイドからの書誌的な研究のあるものを取り上げるのが妥当と考えたのだが、その条件にかなったのが本稿で取り上げる『笠森寺縁起』である。

注

- (1) この間の研究成果としては、「東国出身僧の在京活動と入宋・渡元―武士論の視点から―」（『鎌倉遺文研究』第二五号、二〇一〇年）・鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動―了行・道源に関する訂正と補遺―」（京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』（以下、『研究紀要』とのみ記す）第二四号、二〇一二年）・「復興」をになった老僧重源と醍醐・日野」（『創造する市民』一〇三、二〇一四年）がある。
- なお、共同研究開始以前の千葉氏一族出身僧に関する研究成果としては、「了行の周辺」（『東方学報』第七三冊、二〇〇一年）がある。
- (2) 二〇一三年度末には「十二世紀末における阿波国の武士団の存在形態―いわゆる「田口成良」の実像を中心に―」、二〇一四年度末には「治承・寿永内乱にともなう鎌倉勢力の鎮西進出について」、二〇一五年度末には「源頼朝の挙兵と諸国の目代」を、それぞれ『研究紀要』第二七・二八・二九号に発表した。
- (3) このテーマを設定する上で前提とした直近の千葉氏・宇都宮氏関係の研究成果として、「十二世紀における千葉氏」（『千葉いまむかし』第二九号、千葉市教育委員会、二〇一六年）・「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」（『研

究紀要』第二六号、二〇一三年)・「宇都宮頼綱」(平雅行編『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第三卷 公武政権の変容と  
仏教界』清文堂出版、二〇一四年)をあげておく。

(4) 私は以前、領主制論的な立場から、武士団としての椎名氏の成立と存在形態について述べたことがある(「下総国匠瑳南  
条庄地頭椎名氏について」拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出は一九七七年)。

(5) 千葉市美術館編『仏像半島―房総の美しい仏たち』(千葉市美術館・美術館連絡協議会、二〇一三年)。

(6) 拙稿「上総千葉氏の盛衰」(拙編『千葉氏の研究』名著出版、二〇〇〇年、初出は一九八一年)・「上総千葉氏について」(拙  
著『中世東国武士団の研究』、初出は一九八四年)。以下、上総千葉氏に関する事実関係については、上記二つの拙稿を参照  
されたい。

(7) 千葉県教育委員会編『千葉県の文化財』(千葉県文化財センター、一九八〇年)・千葉市美術館平成十一年度秋期特別展図  
録『房総の神と仏』(千葉市美術館、一九九九年)・千葉市美術館編『仏像半島―房総の美しき仏たち―』などを参照。

(8) 拙著『坂東武士団の成立と発展』(戎光祥出版、二〇一三年、初出は弘生書林、一九八二年)・『中世東国武士団の研究』・「源  
氏と坂東武士」(吉川弘文館、二〇〇七年)、拙稿「上総千葉氏の盛衰」・「玉藻前」と上総介・三浦介」(『朱』第四四号、  
二〇〇一年)・「坂東平氏と『平家物語』―上総広常・源平闘争録・畠山重忠のことなど―」『軍記と語り物』第三八号、  
二〇〇二年)など。

## 一 『笠森寺縁起』とその書誌

学界に『笠森寺縁起』が初めて紹介されたのは、大森金五郎(一八六七―一九三七)のエッセイ「笠森寺観音利

生記」においてのことである<sup>①</sup>。大森は『武家時代之研究』（上・中・下、全三巻、富山房、一九三三—一九三七年）などを著して、鎌倉時代、とくに源頼朝の研究に大きな業績をのこした歴史学者である。下総国殖生郡又富（千葉県長生郡長南町）の生まれであり、長南町笠森に所在する笠森寺（笠森観音）には幼少の頃からしばしば参詣したというから、その由緒に関心を寄せたのであろう。これによれば、笠森観音の縁起には数種あるが、最古のものが以下に全文を紹介する縁起だという。奥書には宝徳四年（一四五二）九月九日に關伽井坊が護摩堂で書き、その後文龜三年（一五〇三）二月六日に天台沙門行公が、これに斟酌を加えて謹書したと書いてあり、自分の読んだのは元禄元年（一六八八）の写であるという。大森はこれを掲げた上で、各節ごとに登場する地名や人名などの説明を加えている。以下に全文を転載する（漢字は新字体にあらためた）。

#### 敬白笠森寺縁起の事

上総国刑部郡朝立チ山の麓、鹿ノ背桜井の里に年来箕を作りて過ぎける男侍りき。男女五人の子を持ちたり。男二人女子三人なり、弟女は十三に成けり、容顔麗くして平生の振舞ひ人に勝れ、世に類なく見えけり。信力深くして孝行浅からず、常に一人にて尾上の観音へ月参しけり、姉共申す様は、何条賤しき下臈の子と生れ、貴き上臈などのまねをして、神仏に参ずる事やある。そは短命の相なり。父の箕を作り給はん内は藤をも剝ぎ、母の稲をこき給はん折は稲をも運ぶべきに、さはせずしてあくかれ歩き、行末とても叶ふべからざる由檻りける。母是を聞て申すやう、姉共の申す処道理あるに似たり、さはあれども、彼は自らが心に叶はんと宮仕へ朝夕に違ふ事なく、神仏に参る事親兄弟今生の祈なるべし。いくら和らいで御前達生成たりとも此の世を養ひ、無からん跡を問はん事、弟女より外は有じと云ひけり。総じて何事を為しても見苦しき事なく、田を植ゑなん

どするも比ひなく、国中の名々も讚めけり。

其の頃、都におはす三条右大臣の御子大宮の中将公美男にして色を好み、和歌の名人、京中隠れなき人におはしけり。嵯峨の中将殿の女を北の方に迎取り給ふ。彼の女も質月花に譬へ、膚は雪霜に諍ふ。天下第一の美人とぞ申ける。然る間寵愛浅からず、比翼連理の語らひを成し給ふ。かくある処に御年十七歳にて、軽き身に重き病を受け給ひ、一日は瘡病になやみ給ひ、二日は風、此の病弥々増し、二十八日と申すに此の御方遂に儂くなり給ふ。中将は諸共に無き身とも成り、同じ路にこそ有らめと歎き給ふ。父母是を聞食し、女こそ有らめ、我等を捨てさせ給ふべきに非ずと慰め給ふにより、とも角月日を送り給へ共、露ばかりも忘れ給ふ事もなく、せめて都を出で、田舎に下り、多くの人も見、若しや北の方の様なる人もや有らんと思召て、帝王に暇を申させ給へば、何様にも汝の心に任すべしと宣旨を蒙りて、中将啼々上総国に下り、司東郡市原と云ふ所に符中を立て、色々の遊共を始め御覧あるに、北の方に似給へる人も無し、かく有べきに非ずとて、五月の比なれば五月女をそろへて田を植ゑさせて見んとの御詔なり。国司の仰せに云ふ。当国は庄郡共に二十四郡なり、されば一郡に三人づゝの五月女を參らせよと仰せけり。但し装束疎にしたらん地頭に於ては、妻子眷属共に流罪せらるべしと仰せられし故に、我も我もと五月女を勝られけり。一人の装束は七千段とぞ定めらる。

爰に将門の將軍の御末に忠常の息刑部三郎成常に笠する人は無りけり。されば十二三日の間に五百八拾人の五月女を集めさせ、選り勝り給ふに、箕作が女に勝る五月女はなし。これを一番と定めて笠の装を尽されけり。夏山に鹿を作りて勢子を入れたる処を金銀にて作りたり。価値万疋とぞ聞えたり。既に其の日に成りしかば、二重に青地の錦かつき、金銀にて菊形を並べて打たりける。頃は治安元年辛酉五月十二日と定めらる。司東郡も栄えけり。されば地頭毎に五月女を結構に我も我もと參らせける。左衛門尉の五月女は遅れて五月十三日酉

の時に符中には参りける。箕作が女の供には桜井五郎、北堅三郎、三輪太郎、司東四郎、小山九郎、形切八郎、上野太郎、古氷三郎、此の人々を始め、家の子殿原五拾人御供ありて、国司へ参らせ給ひけり。其の日雨ごとに降り、淵沢の流を過ぎ行く、桜井の鹿ノ背、水呑の里峯山崎が岩屋を通る程に、岩の中にあさましく朽こぼれ給へる観音立ち給ふ、五月雨繁くして岩きり伝ひ、濡れ給ふを見て箕作が女思ふやう、仏濡れ給ふを見ながら我笠を着て通らん事二世の心苦しみなり、身はとに角に仏にこそと思ひ、装束の笠を観音の御上にきせ参らせ人にも知らさずして指のさきより血を出して、仏の御上にかくなん、

法華経の一二の巻に笠森の

花咲く世にも値ひにける哉

と書きて密に申しけるは、この笠は世の常の笠にはあらず、金銀千両に及んで作りて候、自ら命ちの内に忘れ参らせまじく候、三宝の物を参らせて空しからずと見えたり。さればよそながら聴聞申すに、心地観経に云ふ、七の徳を説き給ふ、一には国王の位、二は転輪聖王、三は五天に至る、四は大国の主と成る、七は諸の苦患を免れて現世安穩のみならず、後世には必ず無上の果報を得んと云々。我等浅間敷き賤の女が子なりとも、此の国の主に必ず成し給へ、御堂を作り本尊を安置し申し、末代まで仏の御利生弘め参らせんと宿願を申して、夫より符中へ参りけり、供の人何とて笠をば持せ給はぬと申ければ、返事も無くして桜井藤沢を通り、鴨坂岩出に山沓抜も打過ぎ、烏呑の中山過ぎて符中へ着けり。

各々五月女参り集りたる中に、箕作が女は人に勝れし美人なりし故、督殿は御覧じて、あの南の三番目に参りたるは誰が進めたる五月女ぞと御尋ねありしかば目代殿申されけるは、葛原の第三の苗裔上総権守に三男、佐是郡の主にておはします刑部三郎成常が此の十二三日間に五百八拾人の五月女を集め勝りて、独りの五月女

を参らせて候と申しければ、国司は大に喜び、此の五月女を参らせたる引出物として景と云ふ御馬、天河照山と云ふ御馬を給ひ、尚ほ其の上に火威鎧、弓矢、籙、皆具そろへ、其の所領としては伊保庄、□□庄、東南里を相伝し、七代までも屋敷所を遣はすと仰せければ、佐是三郎殿承つて喜び斜ならず、重ねて国司の仰せけるは彼の五月女をいみじく出立せて目代殿の許まで上せよとの御詔なり、さて佐是三郎殿は今日より父と憑めと命じければ、今日吉日なりとて箕作が女をいみじくこそ出立せらる、女房達十八人、はしたものの十人、殿居五人、中居の者八人、雑色十二人、力者八人、中間五人、長持七十竿、小尻に金巻きたる輿三丁、箕作が女を之に乗せて国司へ参らせ給ふ。国司是を御覧じて仰せけるは、自が田舎へ下り侍んべるも、斯様の美人有りもやせんと思ひてなり。朝夕の歎きにも別れ申せし北の方をゆかしく恋しと思ひしに、体も心も少しも違はず、写し替へても似給へる物かなと悦び給ふこと限りなし。されば只佐是三郎殿をば今日より父と憑むとぞ仰せらる。かくて七月廿三日吉日なりとて督殿急ぎ京へ上らせ給ふとありければ、彼の箕作を召して刑部丞に成させ、嫡子を修理亮に成し、次男を式部丞、三郎婿を源左衛門丞、四郎婿には真野郡を屋敷所に給ひ、埴生郡をば次男に給ふ。かの兄弟悉く所知給はり、右兵衛左兵衛に成さる。国中上下の人々集りて申しけるは、昔伊弉冉尊より素盞鳴尊に至るまで斯るためし無し、僅の間に三十余騎の勢にて然るべき女房達、輿卅六丁にて上りければ、帝王は此の由聞召し、宣旨を下され、目出たき女房の田舎より上りたりと聞召す、急ぎ内裏へ参らせよとありければ、遂に北の方参内あり。中将は内大臣に成り給ふ。北の方参り給ふに都女房京上臈大小諸人集りて田舎女房を見たるに、誠にやさしく桜梅の風に靡き、槿花の露を含むに異らず、起居のふるまひ満月の曲なきが如く、自ら卅二相を備へ、日本無雙の美人、上古末代にも有るまじとぞ讚ける。輿より下りて歩むさまは昔せいやうけんの臣下うしかうと云ひける画師の描きたりし女房の絵に異ならざるなり。斯様の者も田舎に在りける

よと帝王仰せられて一月に十五日は南殿の宮仕へ申すべしと宣旨あり。また御感の余りに国に思ふ事やあると仰せらるれば、北の方申すやう、何事も思ひ置く候はず、たゞ観音堂を作りて参らせばやと宿願申す候と申しければ、帝王聞召して安き事なり、さらば左大将上総国に下り、北の方の陳ぶる観音堂を作らせよ、番匠は飛驒内匠が孫一条康頼、堀河友成、大工若番匠卅余人急ぎ下り、四ヶ年の土貢を留めて建立せよとの宣旨を下すべしと仰せられければ、急ぎ上総国へ下り造営の用意せられけり。

大工の費用としては安房上総常陸下総の四国を沙汰せられければ、北の方の威光の高きこと夥しく、四ヶ国を始めとして天下に聞伝ふる人々申す様は、斯る果報目出たき上臆は見もせず聞きもせず、哀れ如何なる次にも拝み申さばやとぞ言ひける。さる間長元元年四月十日を新立として百二十日と申すに御堂悉く造営あり、帝王よりは法東院と云ふ号を下し給ふ。仏法東漸故に末世の御法かく盛なるなり。北の方は笠森寺と名附く、五月女の時に被たる笠を奉りたるに心願空しからずして成就したる故なるべし。供養導師としては東大寺の超見僧都を下され、願文の筆者は安芸守と定めらる。かくて供養も過ぎければ北の方心願空しからずして悦を究め榮華の樂に耽り、若者六人姫君三人を育て給ひ、何れも果報世に隠れなく天下に聞へ給ふ。さて北の方は八十余歳にて命終ありて十一面観音と現はれ給ひけり。抑も当寺は無始無終の山、自然出現の靈地と申し伝へ、伝教弘法慈覚等の大師何れも再興あり、其の以前は数十年、始めは申しも伝へず、一たび此の縁起を聴聞の人は無始己来の罪障滅し、安養九品の蓮台に住する事何の疑があらん、仍て利生を蒙むり奇特を見ん人代々限りなし、大概を注記する事如件。

この縁起に国文学の立場から検討を加えたのが仏教文学研究の泰斗として知られる永井義憲（一九一四～）であ

る。永井はこれを各種現存の笠森寺縁起のうち古態を伝えるものとする大森金五郎の評価を踏まえた上で、「この縁起の成立は、その行文、叙述からその奥書のごとく宝徳四年（一四五三）の作と認むべきであろう」と述べている。<sup>(2)</sup>

## 注

(1) 『随感随録史伝史話』（文友社、一九二五年）収録。永井義憲「長柄寺社縁起集」（長柄町史編纂委員会編『長柄町史 研究篇(3)』、長柄町、一九七七年）によると、『笠森寺縁起』は大森金五郎が大正九年（一九二〇）に紹介し、のちに『随感随録 史伝史話』におさめられたものという。「長柄寺社縁起集」にも全文掲載。

(2) 永井義憲「長柄寺社縁起集」。不審なのは、宝徳四年が七月に享徳と改元されていることだが、これは大森も注記しており（ただし、享徳を康正と誤っている）、永井はこれに触れていない。奥書の九月九日は、改元直後のことで、情報の伝達が不徹底であったゆえとみて問題にならないと考えたのであろう。

なお、この縁起を取り上げた国文学サイトからの研究としては、元吉進「『更級日記』上総国笠森観音」（同『更級日記と東国の風景』武蔵野書院、二〇一八年、初出二〇一六年）があるが、書誌の検討や参考とされた文献などの点で、歴史的側面からの考察に資するには難があると思われる。

二 歴史的事実との照応

1 『笠森寺縁起』に籠められた中世上総の記憶

『今昔物語集』を嚆矢として、中世説話にはその素材を史実に求めているものが多い。また、ストーリーが誇張に満ちた架空のものであったにせよ、そこには必ず実在した人名や地名が織り込まれている。<sup>(1)</sup>特に寺社縁起の場合、正統性や権威付けをはかるために、史実を織り込みながら天皇や貴族・高僧、著名な人物が引き合いに出されるのである。こうした条件を踏まえながら、この『笠森寺縁起』を中世上総の歴史に関する僅かな手がかりの一つとして捉え、人々の記憶の跡をたどってみることもあながち無意味とはいえないと思う。

この縁起を見ると、まず都の貴族として「三条右大臣」、その子で上総国守として司東（市東）郡市原に下って符中（府中）を立てた「大宮の中将」があり、彼はのちに上総から妻として迎えた美女（箕作の娘）を参内させたことで内大臣に任じられる。その舅（前妻の父）にあたるのが「嵯峨の中将殿」である。説話の設定された時期は治安・長元の頃（後一条天皇の在位期）であるから、これらの名から人物を特定しうすれば可能であるかも知れないが、これらは中世の説話・物語に頻出する名前であるから、おそらくその作業は意味を持たないであろう。

一方、物語の舞台である上総国では、平将門の子孫で上総権守の「忠常」、その三男で佐是郡を支配する「刑部三郎成常」別名「佐是三郎」、国守のもとに五月女を貢進する地頭の一人である「左衛門尉」、五月女となった美女の供人として「桜井五郎、北堅三郎、三輪太郎、司東四郎、小山九郎、形切八郎、上野太郎、古氷三郎」の名があげられる。そして「箕作」を業としていた美女の父は「刑部丞」、その嫡子は「修理亮」に任じられ、次男は「式

部丞」となって埴生郡を給い、刑部丞の三郎掣（三女の掣？）は「源左衛門丞」と称し、四郎掣は真野郡を屋敷所に給わるといふように、これら兄弟は悉く所領を与えられて「右兵衛左兵衛」となったという。また国守に五月女として美女を献じた佐是三郎も、その褒賞として「伊保庄、□□庄、東南里」の相伝をみとめられたという。

## 2 平忠常の乱の記憶

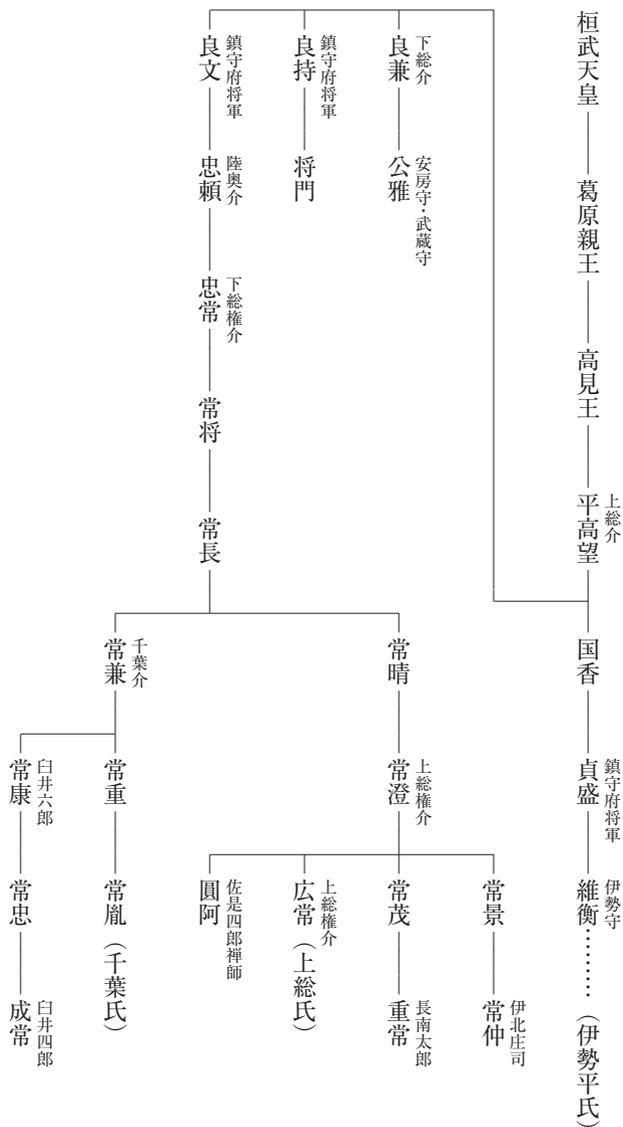
そもそも上総国は親王任国であり、介が受領の任をになうのだが、院政期以降の知行国主ならばいざ知らず、近衛中将のような高官がこのような地位に就くことはなく、さらに任国への赴任に至ってはあり得ないことである。

ただ、平忠常が上総介（上総権介）に任じたことは史料に見えており、しかも中世、千葉氏を始めとする両総平氏一族の間で、彼を平将門の子孫とする先祖観が流布していたことは『源平鬪諍録』<sup>2</sup>などから明らかである。

この説話の時代設定が長元元年（一〇二八）に公然化した平忠常の乱の時期に当ることに注目すべきであろう。<sup>3</sup>「治安元年五月十二日」「長元元年四月十日」とわざわざ具体的な年月日が記されているのは何らかの根拠に基づくものであろう。

この頃の上総の国守（上総介）を見ると、寛仁元年（一〇一七）に補任された菅原孝標は治安元年（一〇二二）に得替（離任）、ついで任じられた藤原為章も万寿二年（一〇二五）に得替し、平忠常の乱勃発時は梶犬養為政が在任しており、長元二年（一〇二九）にいたって、乱鎮圧の任務を担って追討使平直方の父維時が補任されている。<sup>4</sup>忠常も『日本紀略』などに「前上総介」と見えるが、「下総権介」とする史料もあるので、正しくは「権介」として在地にあったと考えるべきであろう。上総介に任じられた者たちはすべて中級以下の貴族で、「大宮の中将」に該当するような人物は見当たらないが、注目されるのはこの中将が内大臣に昇任していることである。史実ではこ

両総平氏系図（『神代本千葉系図』などによる）



の当時内大臣に任じていたのは藤原教通であり、平忠常が彼を本主としていたからである。また、観音堂の造営に際して上総に下ってきた「一条康頼、堀河友成」であるが、康頼は永観二年（九八四）に『医心方』を朝廷に献上された馬・雑物を伴って上洛し、上総の状況と為政の妻子の上洛を右大臣小野宮（藤原）実資に伝えた右大臣家厩舎人伴友成の名を使ったようである（『小右記』長元元年七月十三・十五日条）。伴友成は康頼のように広く知られた人物ではなく、おそらく地元<sup>⑤</sup>に伝えられた忠常の乱に関する情報から取り入れられたものと思われる。とすれば、冒頭に登場する「大宮中将」も、この時左中将だった資平（実資の養子）から連想された可能性も指摘できよう。いずれにしても、この縁起が、その設定された時代からして、平忠常と彼の惹起した反乱の記憶に基づいていることは間違いない。

### 3 大豪族的領主上総氏の記憶

つぎに検討したいのは、忠常の三男として登場する「刑部三郎成常」＝「佐是三郎」である。

「刑部三郎」とか「佐是三郎」というような本拠地（名字の地）を輩号に冠する名乗りが一般化するの是在地領主制の進展する十二世紀前半の頃からのことである。成常は忠常の子とされるが、そのような人物は史料上確認できず、むしろ中世的な郡として刑部郡や佐是郡が成立した段階の人物をモデルにしたと考えるのが妥当であろう。

平忠常の子孫たちは上総・下総の各地に在地領主として展開し、「両総平氏」として概念化されている。その族長は上総国玉崎（一宮）庄を本拠にした上総氏であり、十二世紀末、広常が坂東最大の武士団を構成して、源頼朝の挙兵に際して活躍したことはよく知られている。<sup>⑤</sup> 中世前期の千葉氏の一族を記す系図中もっとも信頼の置ける『神



房総の公領と荘園 (12世紀末)

代本千葉系図』には上総氏の系統も詳しく記されているが、広常の叔父の一人に「佐是禪師圓阿」の名が記されており、また、『源平鬪諍録』（巻五）にも上総広常に動員された武士の中に「佐是四郎禪師」が見える。

一方、「成常」という名から考えると、『源平鬪諍録』（巻五）に広常配下の武士として臼井四郎成常が見える。しかし彼の名字の地は下総国臼井郡（現、佐倉市臼井周辺）であるから結びつけにくい。むしろ成常の「成」が本縁起の作成された中世後期には足利成氏のように「しげ」と訓まれていたことを考慮すると、『源平鬪諍録』に広常の軍に従い、『神代本千葉系図』に広常の甥として所見する長南太郎重常を造形のベースと見た方がよいから知らない。長南は古代の長柄郡が解体して成立した中世的郡名で、笠森寺はその遺称地である長南町に所在するからである。いずれにしても、「刑部（佐是）三郎成常」が上総氏一族で郡規模の所領を有する十二世紀段階における在地武士を想定して造形された人物であることは確かといえよう。あるいは、成常は伊保（伊北）庄（史実では、広常の甥でありながら、源頼朝挙兵時に同一行動をとらなかった伊北庄司常伸の所領）まで与えられているから、そのモデルとすべき存在は広常の父の常澄（上総権介）あたりに比定した方がよいのかも知れない。

次に主人公の美女が五月女として符中（府中）に向かった際にその供として付き従った人々を見よう。彼らは国守の指示によって国衛に五月女を貢進するような立場にあった郡司クラスの在地領主（地頭）に従う村郷司クラスの存在とみてよいだろう。その名字から、彼らの本拠を推測すると、「桜井五郎」は文祿三年（一五九四）の上総国村高帳に「桜谷村」と見える現在の長柄町桜谷、「司東四郎」は古代の市原郡が解体して成立した市東郡、「上野太郎」は現在の長柄町上野、「古氷（ごごおり？）三郎」は長柄町国府里であったようで、何れも当地方に実在した人物がモデルとされたのであろう。

## 4 上総千葉氏の記憶

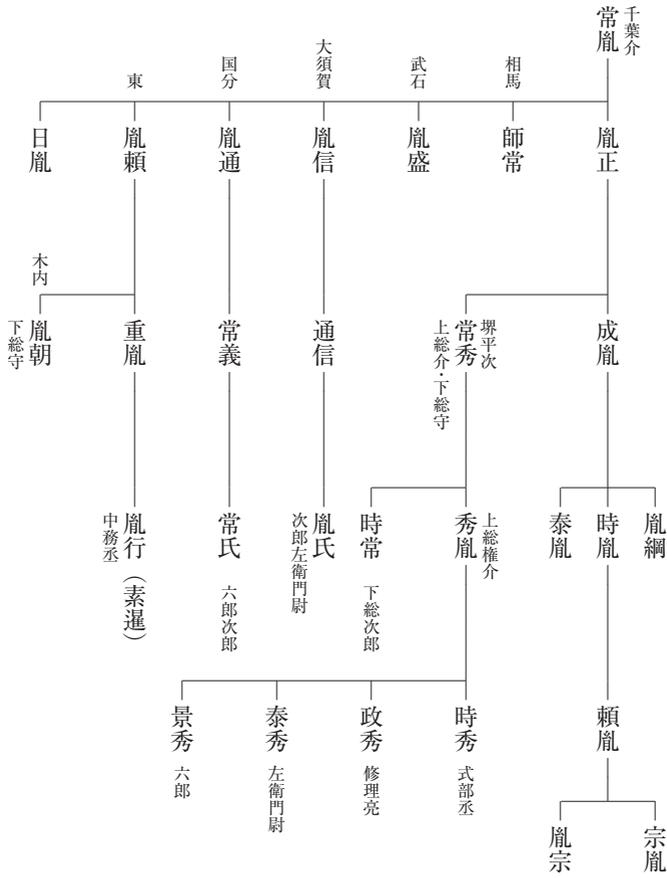
美女の父である「箕作」やその子息、婿たちが任じられた官職も興味深い。宝治元年（一二四七）六月、三浦泰村に連座して滅亡した千葉秀胤の一族と共通する部分が多いからである。『吾妻鏡』同年六月七日条には以下のように見える（国史大系本によるが、返り点は省略し、字体をあらためたものもある）。

七日戊子。天晴。胤氏。素暹等襲秀胤上総國一宮大柳之館。于時當國御家人如雲霞起而成合力。秀胤兼用意之間。積置炭薪等於館郭外之四面。皆悉放火。其焰太熾而非人馬之可通路。仍軍兵安轡於門外。僅造時聲發箭。爰敵軍出逢馬場邊。射答箭。此間。上総權介秀胤。嫡男(a)式部大夫時秀。次男修理亮政秀。三男左衛門尉泰秀。

四男六郎景秀。心靜凝念佛讀經等之勤。各自殺。其後數十宇舍屋同時放火。内外猛火混而迸半天。胤氏以下郎從等咽其熾勢。還遁避于數十町之外。敢不能獲彼首(b)。又下総次郎時常自昨夕入籠此館。同令自殺。是秀胤舍弟也。相傳亡父下総前司常秀遺領垣生庄之處。爲秀胤被押領之間。年來雖含鬱陶。至斯時。並死骸於一席。勇士之所美談也。抑泰村誅罰事。五日午刻。通當國之聽(c)。

この日、上総国大柳館は大須賀胤氏・東素暹（胤行）ら同族たちによって構成された幕府追討軍の攻撃の前に、紅蓮の炎に包まれ、二代にわたって両総に君臨した上総千葉氏は滅亡したのである。ときの大柳館の主は千葉氏一族中でただひとり評定衆に列した経歴を持つ千葉秀胤であった。注目されるのは彼の子息たちの官途である（a）。式部大夫（五位の式部丞）時秀・修理亮政秀・左衛門尉泰秀、ことごとく一致する。また、縁起の「埴生郡をば次男に給ふ」というフレーズは、本条に見える、兄秀胤に下総国埴生庄を押領されたにも拘わらず秀胤と運命をともした「次郎時常」のエピソードと結びつく（b）。「三郎婿を源左衛門丞、四郎婿には真野郡を屋敷所に給ひ」という部分は、秀胤滅亡後の遺領継承者を「婿」という形で伝えたものかも知れない。真野郡は『笠森寺縁起』が成

千葉氏系図



〔神代本千葉系図〕などによる

立した当時上総国に実在した中世的郡名であり、上総千葉氏滅亡以前はその所領域内にあったものとみてよい。また「右兵衛左兵衛に成さる」も、秀胤の父常秀が建久元年（一一九〇）に祖父常胤の功を譲られて左兵衛尉に補任されて以来、長く「平次兵衛尉」と呼ばれていた事実を想起させる。<sup>(8)</sup>

そして、さらに注目されるのが、この上総千葉氏滅亡の直前、秀胤がいわゆる「宮騒動」（寛元の政変）で評定衆を罷免されたその年に、上総国の知行国主藤原基家に「五節の舞姫」の貢進が宛てられているという事実である。基家は摂政・関白を歴任した九条道家の弟で、しかも「前内大臣」であった。<sup>(9)</sup> 国衙機構を通じての朝廷に対する美女貢進の賦課、そしてそれを命じた知行国主が内大臣の官歴を有していること、まさに、この縁起の骨格を成すストーリーと符合することになる。

#### 注

- (1) たとえば、俵の藤太伝説の生成過程や秀郷流藤原氏系の武士に関わる説話と史実との関係については、拙著『伝説の将軍 藤原秀郷』（吉川弘文館、二〇〇二年）を参照されたい。
- なお、以下、『笠森寺縁起』に登場する地名の現在地比定は、平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系12 千葉県』の地名（平凡社、一九九六年）による。
- (2) 福田豊彦・服部幸造全注釈『源平闘諍録』上（講談社学術文庫、一九九九年）四十二ページ以下を参照。
- (3) 平忠常の乱に関する歴史的な事実については、拙稿「平忠常の乱の経過について―追討の私戦的側面について―」（拙著『坂東武士団の成立と発展』戎光祥出版、二〇一三年、初出は一九七八年）を参照されたい。
- (4) 上総国の国司補任状況については、中込律子『埼玉県史調査報告書 坂東八箇国国司表』（埼玉県県民部県史編さん室、

一九八七年) および菊池紳一・宮崎康充編「国司一覽」(児玉幸多ほか監修『日本史総覧Ⅱ 古代Ⅱ・中世Ⅱ』新人物往来社、一九八四年)を参照。

(5) 拙稿「上総氏と千葉氏」(拙著『坂東武士団の成立と発展』など)。

(6) 拙稿「千葉氏系図の中の上総氏」(峰岸純夫ほか『中世武家系図の史料論 上巻』高志書院、二〇〇七年)。

(7) 拙稿「鎌倉幕府の成立と下総臼井氏一族」(拙著『中世東国武士団の研究』、初出は一九九二年)。

(8) 拙稿「上総千葉氏の盛衰」・「上総千葉氏について」。

(9) 『民経記』寛元四年九月八日条、『葉黄記』・『百練抄』寛元四年十一月二十二日条。なお、「五節の舞姫」については、服藤早苗「院政期の五節く五節の舞姫・童女たちへのまなざし」(『研究紀要』第二七号、二〇一四年)・『平安王朝の五節舞姫・童女 天皇と大嘗祭・新嘗祭』(瑞書房、二〇一五年)を参照されたい。

## おわりに

「供養導師としては東大寺の超見僧都を下され、願文の筆者は安芸守」の「安芸守」は比定困難だが、東大寺の「超見」<sup>①</sup>はチヨウケンの方は即座に東大寺再建に携わった重源<sup>②</sup>はチヨウケンを想起させる。

ちなみに、笠森寺の北方、長柄町長柄山にある眼蔵寺(近世までは「胎蔵寺」)には千葉秀胤夫妻のものと思われる位牌が伝えられている。ここに掲載した写真は、一九八一年十一月十七日に千葉県高等学校教育研究会歴史部の「長生地臨地研究会」で眼蔵寺を訪れた際に撮影したものである。<sup>②</sup>表面の「長柄山殿別駕秀胤大居士」が千葉秀胤、「胎蔵寺殿花溪妙泉大信女」が秀胤の妻、すなわち三浦泰村の妹ということになる。そして、裏面には「万



千葉秀胤夫妻の位牌（眼蔵寺）

寿四丁卯歳七月二十四日」「長元三庚午年七月七日」と表面の二人に対応するように並記されている。<sup>③</sup>常識的に考えれば、この夫妻それぞれの没年ということになろうが、この年代は十一世紀前半、まさに平忠常の時代のものである。位牌の記名はこの寺で平忠常と千葉秀胤が混同して伝えられたことを反映している。『笠森寺縁起』において、十一世紀の平忠常と十二世紀の上総氏、そして十三世紀の上総千葉氏の記憶が渾然一体となって伝えられたように、この地方では、忠常と上総氏、そして千葉氏、いずれも滅亡を遂げた巨大な勢力の記憶が集約された形で伝えられたのであった。<sup>④</sup>

さらに一点付け加えておきたいことがある。それは本稿執筆の過程で上智大学の西岡芳文氏から御教示いただいた東京都品川区専修寺所蔵の阿弥陀三尊像の由来である。この像はもとは上総国佐是郡池和田の正福寺にあったものだが、その造像が十二世紀末、すなわち上総氏やその一族の佐是氏が活動していた時期に想定され、しかもその作風は中央のもので、東国の作風は認められないというのである。<sup>⑤</sup>

当時の上総地方の文化環境について再考を迫る指摘といえよう。「平安末期の東国の文化水準は低く、都から隔絶されたその空間に住む武士たちは、雄々しく質実剛健で純粋であったが、多くの者は文字すら解せなかった」などという通説的な評価は、近代における「軍国教育」の要請に基づいて流布された一面的な虚構とみるべきであろう。<sup>6)</sup>なお、この『笠森寺縁起』には、たとえば国衙による五月女の徴発など、当時の実態を反映したとみられる興味深い話が含まれており、社会経済史あるいは社会史的な視角からの検討も要請されるであろう。後学の研究に期待したい。

## 注

(1) 重源については、拙稿「復興」をになった老僧重源と醍醐・日野」(『創造する市民』第一〇三号、京都市生涯学習振興財団、二〇一四年)を参照されたい。

(2) 研究会の詳細については、『房総史学』第二二号(千葉県高等学校教育研究会歴史部会、一九八二年)掲載の「臨地研究会の記録」および「部会一年のあゆみ」を参照されたい。

(3) 『睦沢村史』(睦沢村史編さん会議編、千葉県長生郡睦沢村、一九七七年)一四〇～一四一頁参照。

(4) 長生郡長柄町長柄山に所在した六地藏寺の縁起「延命六地藏菩薩縁起」は近世以降に成立したものであるが、ここでも千葉秀胤が主人公となっているにも拘わらず、設定された時代は笠森寺縁起と同じく万寿～長元年間であり、素材の共通がかがえる。秀胤夫妻の位牌を伝えた胎蔵寺(現、眼蔵寺)の縁起「長柄山胎蔵寺仮名縁起略」も近世の作で、内容もこれと同題のものである。

両本ともに永井義憲「長柄寺社縁起集」に収録されているが、今後の検討に資するため、以下に前者の全文を転載しておく。

## 延命六地藏菩薩縁起

大日本国上総州市西郡内。延命山六地藏寺始者。長柄山殿秀胤公守本尊也。右秀胤公者。桓武天皇末孫。将門親王家胤千葉介一族也。然父秀家公。天然無道勇士。而害多人。殊好殺生。終短命不幸了。秀胤時移祚薄。一介之壮士矣。秀胤思召様其人界相者。以今日而知三世。我如何成業生歟。幼少離母。乍我父秀家公。短慮不仁過給。未來業報可重。何我領内。建立一字精舍。為父母經營。又被為殺生者共。供養可成。明暮祈地藏菩薩。有時心地不平。而生緣已尽。赴冥土黄泉。詣閻魔法王庁。閻王問曰。汝於娑婆界有願。速還可成彼願。秀胤答曰。我貧窮無福。而無願心。只為父母一寺建立之願耳也。閻王曰。依其孝順心德。功德火起。燒却前來罪業。父母者善処生也。諸天三宝。加護汝給。秀胤歡喜合掌曰。争得速還哉。閻王曰。生死自由。朕為其守護。開方便門与生活文。秀胤曰。縱得再生。家貧而願心難成。閻王曰。汝旧柄。西有黄金軸。当興建之節。朕放光。又幸筑紫肥前州探題長者。有独姬。与汝同時来。初死再活之縁。自過去結不淺。俱蘇成夫婦之契。則可成彼願。秀胤曰。娑婆之群類不正信。則以何為其証。閻王曰。朕可与宝印。汝等近前來。取兩人之手。合一処。宝印秀胤与姬。辱握宝印。忽然如夢覺乃得蘇矣。爾来寬弘八年辛亥六月中旬。秀胤発我旧柄。赴筑紫。或踏嶮渡川。或風浪露宿。漸着遠江州駅亭。養倦。茲聞往来相話云。有自筑紫。到関東者乃淑姬也。今日着此地。容貌美麗。俶裝可視。秀胤怪之。私使人窺其宿処。彼長者姬更無疑。於茲秀胤伝冥土之因縁。姬曰。然則有其証文。秀胤忽出逢開掌示其証文。則点不差。直含歡喜笑。依此改其処。号見付里也。即発彼処。坂上総歴佐是国吉移此地。長和二年次癸丑春二月。掘山即如閻王之教。得百千兩之黄金。終成七堂伽藍功既成就矣。是皆地藏菩薩御影也。益信給。有時秀胤召聚在処人。我已娑婆縁尽。赴本有之浄土也。我是地藏菩薩之化身也。衆生利益之為其仮現秀胤。我恣鋪思者。可拜此地藏大士。自宣声下紫雲共化給。頃者万寿四年七月二十四日午刻也。人々驚感心残多。難有又不思議也。扱愚人者。無是非尋常御方思不知。無礼之罪程可恐。無勿体只此上者。敬地藏菩薩。併茲儘疎也。御堂建立仕。念仏回向無。若事此儀。尤面々勵志之勢力。而明長元元年戊辰三月二十四日。御堂悉成就矣。奉菩薩。即胎藏寺方丈百済国沙門戒乘和尚。為安座供養導師。貴賤群集成給。其時戒乘曰。新莊嚴功成事。信実至心。奇特

難述言語。次山号寺号可定。任菩薩緣。延命山。地藏大士者。六道応化為教主。可号六地藏寺。抑此菩薩者。昔仏在法羅陀山。為帝釈讚歎曰。信地藏菩薩。心得十種福。一者女人泰産。二者身根具足。三者衆病悉除。四者壽命長遠。五者聰明智慧。六者財宝盈溢。七者衆人愛敬。八者穀米成熟。九者神明加護。十者証大菩薩。又告帝釈。於未來世。若有衆生。恭敬供養。是地藏菩薩者。百由旬内。現種々身。遊化六道。度脱衆生。能以一善。破三界有云々。爾時延命地藏。從地出現。手持錫杖。白仏言。我每日晨朝。入諸定。入諸地獄。令難苦。無仏世界。度衆生。今世後世能引導。一切男女。欲得我福者。不問日凶。不論不淨。乃至称我名者。我以法眼。威神力故。即轉業。報令得現果。除無間罪。當得菩提。況人界。若有重苦。我代受苦。不爾者。不取正覺也。各如形。難有菩薩之慈悲。唯可增長信心者也。聽衆悉未曾有有喜。去誠哉。此菩薩靈驗。日新。而近国他国。無隱伝聞。參詣往來之人々。六地藏參申故。在名無何時。六地藏者。此因縁矣。老若男女。矜一度。斯地運歩輩者。無子者授子。貧者与福。延齡。延命山。五穀豐饒。地藏寺争不可有容易。現世安穩。後世善処。少莫疑。慎可崇。尚唯可敬。

縁起大略。仍而如件

(5) 山本勉・荻野愛海・花澤明優美「東京都品川区専修寺阿弥陀三尊像（上総正福寺旧藏）考」（『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第三九号、二〇一八年）。

(6) 近代における軍国教育については、拙稿「近代国民道德としての「武士」認識―軍国国家形成の前提―」（『現代社会研究』創刊号、二〇〇一年）で述べたことがある。

〈キーワード〉

笠森寺 平忠常の乱 上総氏 千葉氏 寺社縁起